

中高生はなぜ勉強しなくなったのか

～中高生の生活と意識調査から～

世論調査研究員 山内利香



子どもの学力が低下しているのではないかと指摘が関心を集め、本来必要な学力とは何かなど、学力に関する議論が高まっています。世論調査部が10年ぶりに実施した「中学生・高校生の生活と意識」調査の結果から、中高生の勉強時間が大きく減少していることが分かりました。また、その背景として中高生と親の両方で、勉強についての考え方やどのような生き方が望ましいかという価値観が変わってきていることが浮かび上がりました。

<調査の概要>

調査相手：全国の中高生の年代
 (1984年4月2日～1990年4月1日生まれ)の男女1,800人とその父母
 調査時期：8月23日(金)～9月1日(日)
 調査方法：中高生 個人面接法
 父母 配付回収法
 調査有効数：中高生 1,341人(74.5%)
 (率) 父親 1,209人(67.2%)
 母親 1,366人(75.9%)



勉強時間の減少

この調査は、82年、87年、92年と3回行われていて今回が4回目です。過去3回の調査と比べて、まず目についた変化が中高生の勉強時間の減少でした。

図1は、夏休み以外のふだんの日、家や学習塾など学校以外のところで、1日平均何時間ぐらい勉強するかという質問への回答を比較したものです。今回の調査では、中高生の勉強時間の実態をより細かく把握するために新たに「30分ぐらい」という選択肢を加えました。このため、過去3回の調査と単純に比較することはできませんが、グラフに示した分布を見ると、勉強時間の減少を読みとることができます。中学生、高校生とも「ほとんど勉強しない」と答えた割合が増えて、「2時間ぐらい」以上の勉強時間の割合が減少しています。

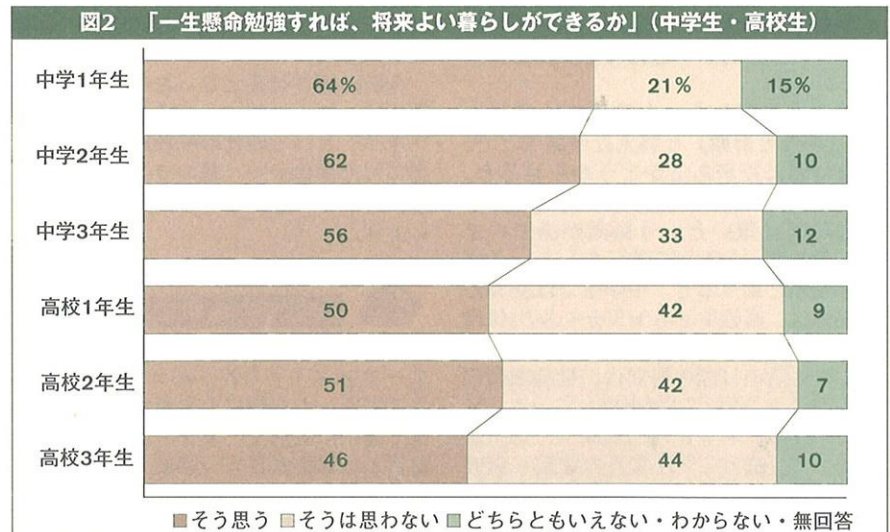
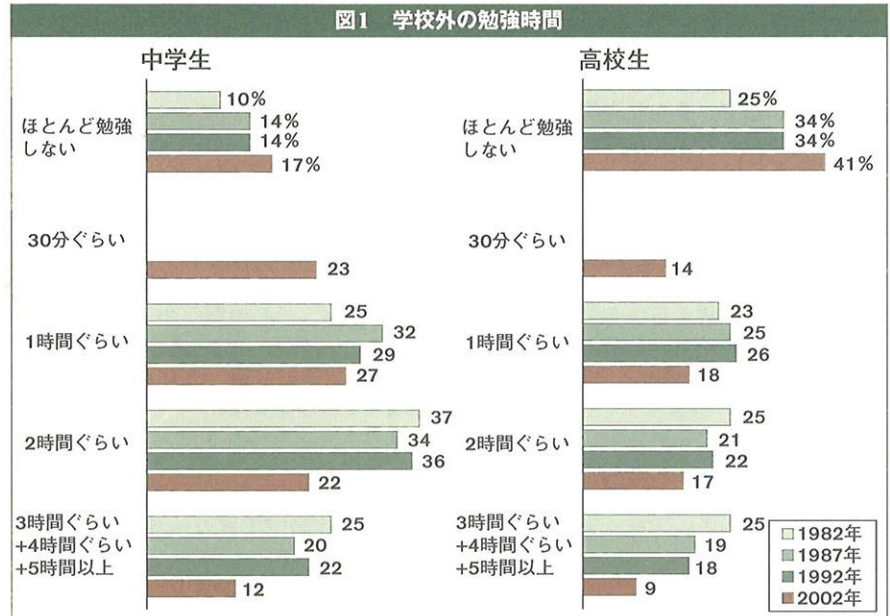


なぜ勉強しなければならぬのか

調査では、勉強についての意識を聞く質問をいくつか盛り込んでいます。その勉強観の質問から、勉強時間がなぜ減ったかを考える手がかりになる結果が得られました。

まず「一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができるようになる」という結果を図2に示します。中学生では「そう思う」という生徒の方が多いものの、学年が上がるにつれて「そう思う」生徒は減少します。そして高校生になると「そう思う」と「そうは思わない」が拮抗します。

「一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができるようになる」というのは、勉



強の動機付けになる考え方です。その動機付けが学年が上がるほど弱まるという傾向が出ています。

親に同じ質問をしたところ、父親、母親ともに70%が「そうは思わない」と答えていて、勉強と将来の良い暮らしとを結びつけていない親の方が圧倒的に多いという結果でした。

次に「受験勉強は、よい学校に行くためだけで、本当の勉強とはいえない」として見ると、中学生では「そうは思わない」が半数を超えています。学年が上がるほど「そう思う」が増える傾向がありました。そして、高校1～2年生で「そう思う」と「そうは思わない」が拮抗して、高校3年生では「そう思う」が

「そうは思わない」を上回りました。

受験勉強を肯定的にとらえるかどうか勉強する動機付けとなります。これも学年が上がるほど動機付けが弱まるという傾向が出ています。

親に同じ質問をしたところ、父親、母親ともに受験勉強を否定的にとらえる人の方が多という結果でした。

さらに、親が子どもに対して「勉強や成績にうるさく言うほうか」どうかを聞いた結果を見ると、「そうは思わない」つまり「勉強や成績にうるさく言わない」父親が82年の78%から2002年には83%に増え、母親も64%から70%に増えています。

「一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができる」と思っている親は少数派で、受験勉強も否定的にとらえています。また、子どもに勉強しろとうるさく言う親も減っています。そうした状況で、子どもが「しっかり勉強しなければ」と思うようになるでしょうか。



「自由に楽しく」派の増加

勉強についての考え方とともに、どのような生き方が望ましいかの価値観の変化が勉強時間の減少の背景にあるようです。図3は生活の目標として4つの選択肢を示して聞いた結果です。「その日その日を、自由に楽しく暮らす」や「身近な人たちと、なごやかな毎を送る」と答えた中学生が多く、中学生の8割近くは現在の感情を大事にする「現在中心」の考え方をしています。

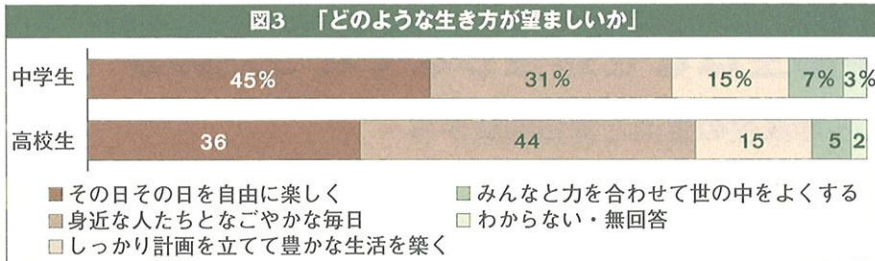
これに対して「しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く」や「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」と答えた中学生は少なく、未来を見据えて行動する「未来志向」の考え方は少数派になっています。

「自由に楽しく」と答えた中学生と「しっかりと計画」と答えた中学生とで、勉強時間に差があるかどうかを見ると、「自由に楽しく」と答えた中学生の方が勉強時間は短いという傾向が出ています。そして、「自由に楽しく」という答えを82年と比べると、中学生では36%から45%に、高校生でも31%から36%に増えています。

この生活の目標の質問は、世論調査部が1973年から5年に1度実施している「日本人の意識」調査と同じ質問文、選択肢を使っています。「日本人の意識」調査でも、78年から98年の20年間に「自由に楽しく」が20%から25%に増えて、「しっかりと計画」は31%から26%に減っています。

「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」という生き方は、中学生だけでなく国民全体で見ても減少しています。親や周囲の大人の生き方が「現在中心」になってきている中で、子どもに対して「未来志向」を強めるように期待するのは難しいのではないのでしょうか。

図3 「どのような生き方が望ましいか」



様々な趣味に打ち込む

「自由に楽しく暮らす」のが良いと思っているからと言って、ただ何もせず漫然と過ごすことを望んでいるわけではありません。「あなたは今、何か打ち込んでやれることをもっていますか」という質問の結果を見ると、打ち込む対象が以前よりバラエティーに富んでいます。

「勉強」、「スポーツ」、「音楽」、「その他」という4つに分類すると、中学生、高校生ともに「スポーツ」が最も多く、「勉強」は82年から今回まで10%前後で推移しています。増えたのは「その他」で、中学生では82年の7%から今回は13%に、高校生でも10%から15%に増加しています。「その他」の具体的な内容を見ると、「読書」「絵を書くこと」「書道」「パレエ」など芸術・文化系の趣味が半数近くを占めました。

「モーレツからビューティフルへ」というキャッチコピーの商業が話題になったのが1970年。高度経済成長期の仕事一辺倒の生き方に対する“反省”から、70年代から80年代にかけて、国をあげて労働時間の短縮が進められました。その後のバブル景気の時代も通じて、日本人の意識は仕事重視から余暇を楽しむ考え方、余暇を重視する考え方へと移っています。

今回の調査対象となった中高生の親の世代は、この「モーレツからビューティフルへ」という時代の転換期に思春期を過ごした世代です。親のライフスタイルが、子どもに影響するのは自然なことでしょう。



「手に職」志向

「パークレンジャー」「メーカーアートイスト」「ゲームクリエイター」大人になったら何になりたいか、自由回答で聞いた質問で、カタカナで表記される新しい職業が目につきました。カタカナ職業だけでなく、「犬の訓練士」「理学療法士」「声優」「洋菓子の職人」など、中学生は実にさまざまな職業をあげています。

回答を分類して集計した結果、中学生で最も多かったのは「スポーツ選手」の8%で、高校生では介護福祉士や医療療法士などの「福祉・医療関係」の5%でした。10年前に比べ目立って減ったのは「サラリーマン」で、中学生では7%から2%になっています。高校生でも10%から7%

に減りました。一方、専門的な技術や資格が必要な職業が増える傾向が見られ「手に職」志向がうかがわれました。

父親、母親に対しても、やはり自由回答で「将来子どもについてもらいたい職業」を聞いています。父親、母親も「サラリーマン」の減少が目立っています。増えているのは「子どもにまかせる」という主旨の回答で、10年前の3倍の15～16%になっています。

このところ、大企業の倒産や人員削減が続いて、雇用情勢は悪化の一途をたどり、2001年7月には完全失業率が初めて5%まで上昇しました。大学生や高校生の就職についても「超氷河期」という表現が使われるほど、厳しい状況が続いています。

「有名大学を出て一流企業のサラリーマンになれば安定した暮らしが送れるだろう」という価値観が崩れて、「子どもにまかせる」という親が増えています。そして、まかせられた子どもを待っているのは“超氷河期”なのです。

「パークレンジャー」の求人がどの程度あるのか、そこまで考えている中学生は少ないかもしれませんが、子どもたちは、雇用情勢が厳しい中で、自分なりに何になろうかと考えて、自分なりの夢を描いているのではないのでしょうか。



勉強に束縛されない中学生

中学生はなぜ勉強しなくなったのか。「勉強に束縛されなくなったから」というのが、調査結果を分析した結果として、今、我々が考えている理由です。有名大学から大企業のサラリーマンという価値観が崩れ、親も勉強しろとうるさく言わなくなっています。スポーツや趣味に打ち込んでいて、将来の夢も自分なりに持っています。もちろん勉強に追われている中学生も一部にはいますが、全体としては勉強をしなればという圧力は弱まっています。

勉強時間の減少だけを問題にして、中学生を再び束縛するような形で勉強させようとしても難しいでしょう。「パークレンジャー」になりたいと思っている高校生に、「その夢を実現するためにはこんな勉強が必要だよ」と促して、勉強することの意味を感じられるようにすること、そんな“学びのすすめ”が必要ではないのでしょうか。

詳しくは『放送研究と調査』12月号をご覧ください。■